

ベッドの下の蟻に仰天 人生で初めて真剣に勉強 タイ留学

文学部社会科学科4年 峯理佳子

Sawadii kha (サワディカー、“こんにちは”の意)。昨年8月から5月までタイのトゥラキッド・バンディット大学(DPU)に留学しました。アジアはもちろん、遠くはアフリカ、欧米からの様々な人種が混在している東南アジア経済の中心地バンコクから都市から日本に舞い戻って痛感したのは、驚くほどの英語表記の少なさでした。

DPUでは、講義が英語のIC(International college)に所属していました。日本人学生は、



私だけ。海外から来たクラスメートとの会話もちろん英語でした。

現在も、上手とは決して言えませんが、英会話の経験がゼロだったので、当初は、挨拶から日常会話まで周りの学生と、円滑に意思疎通ができなかったことを鮮明

に覚えています。

他人との会話があんなにも苦痛だったのは、これからもないでしょう。こうした経験や「英語で話ができなければ、生きていけないのではないか」との切羽詰まった危機感のおかげで、机に向かい、人生で初めて真剣に勉強できました。



到着後3日目、宿泊先のアパートで、ベッドの下から、大嫌いな蟻が大量に現れてビックリ仰天。カタコトの英語で、管理人との間で、蟻駆除と部屋の変更の交渉を余儀なくされました。本当に大変で、死ぬ思いでした。留学前から英語は、しっかり学習しておけばよかった、と心底、後悔しました。

タイは、非英語圏です。でも、既に触れたように様々な国籍の人々が生活しているので意外に英語が通じます。セブンイレブンなど日本よりはるかに多いコンビニで売られている商品はもちろん、路上の屋台の看板もタイ語と英語両方で表記されています。



ICは、1学年100人程度の小規模な学部にもかかわらず、タイ、カンボジア、中国、ベ

トナム、ミャンマー、スウェーデン、ブラジルなど世界中からの学生が集結し、その割合は、半数を超えます。スラングが使われることもなく、あくまで「共通語」としての英語が使われていました。とてもやりやすかったです。



最後にタイ語の話をしましょう。主語や述語、副詞、形容詞などの順番が変幻自在に変わり、文法もあまりはっきりしていないタイ語は、本当に難しく、未だに初級の段階です。

もともと、後期になるとネイティブの学生がテキストに載っていないタイ語のちょっと下品なスラングを教えてくださいました。一緒にタイ文字のレッスンを受けていた中国の留学生とどちらが早くタイ文字を修得できるかを競い合いました。タイ語を通して随分様々な学生と打ち解けられたと思います。

IC で出会った友人らはバスで 10 時間程度かかる遠隔地のコンケンに、「明日、行こう」などと突然言い出す、よく言えば活動的、悪く言えば、計画性に欠け、かなり戸惑う事が多かったです。

一緒に行った先は、小学校でした。そこで、校舎のペンキ塗りなどのボランティアに汗を流しました。



かなりの頻度で課されたグループワークも、苦手な分野で、留学しなかったら、決してしなかった経験でしょう。とにかく、予想外の事の連続でした。それに、自分がどう向き合うか、積極的に考え、動く習慣が身につきました。

すべて不消化のまま帰国したので、これからもタイ語の学習を続け、いつかまたバンコクを訪れ、街の人々と、今度は不自由なく、タイ語で会話できたらと考えています。

ขอบคุณมากค่ะ!!! (タイ語でありがとうという意味です。)

